

Title	約百記を読む記
Author(s)	臼井, 竹次郎
Citation	ドイツ文学研究 (1966), 14: 58-72
Issue Date	1966-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2433/184903
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

約百記を讀む記

五八

白井竹次郎

今は昔、宇津の地に約百と名づくる人ありけり。其人と爲り完く且つ正しくて、神を畏れ、惡に遠ざかりたりけり……と讀んで行けば今昔物語の始まりとすることもできさうである。約百記をそんな風に讀んでいいかどうかは別問題として、一つの書にはいろんな讀み方が可能であるから、讀者は一つの讀み方を見つけ、それによつて親しむことになればそれもよいので、讀者は必ずしもこれを研究しようといふのではなく、親しい書が一冊でも多くなることを願つてゐるのである。約百記の研究書といふと随分あるらしく、そのどれをとつてみても教へられることは数々あるだらう。だが研究書を讀めばすべてがわかると思つたら蟲のよすぎる話で、それによつてわかつたことが一つでもあれば、それだけでも感謝しなければならぬ。今回は淺野順一氏の「ヨブ記の研究」が手に入つたのでそれを讀んだ。いろ／＼な言葉についてヘブライ語の意味の説明が與へられたのはよい參考になつた。けれども約百記は、いやこれに限つたわけではないが、讀むほどに難解の箇所が増して来る。日本語譯に英譯と獨譯とならべて、獨譯ではルター譯にマルティン・ブーバーの譯を併せて目を通したが、それでよくわかつたといふのではない。それ／＼の譯にはむづかしい所があり、言葉の比較をやれば與あることだらうと思ひながら素讀したばかりである。約百記はこれからもまたくり返して讀むことであらうし、讀書百遍義自ら通すと

までは行くべくもなからうが、今昔物語の靈驗譚を讀むやうな具合に讀むのを百遍の中の一遍としてもよからう。むづかしい神學や哲學の問題に頭をつつこんだりせず、考證のことも知らないままに、文學書として讀む、それも今昔物語を物語として讀む程度に過ぎない。信仰の書を信仰なしで讀むことは邪道であるかも知れない。だが讀むことによつてこれに親しむことになれば、あなたがち縁なき衆生と却けられることもあるまい。

約百記に始めてめぐり合つたのはファウストの天上の序曲でゲーテがこれを踏襲したのだと知つた時であつて、謂はば必要に追られたのがきつかけであつた。創世記を讀んだのはトーマス・マンのヨセフ小説が機縁であつたし、大體が引用を調べる程度位だつた。四福音書に興味を覺えたのは歎異抄のお蔭であつた。聖書の山をあちこちめぐる中に「詩篇」の實に驚嘆したり、ともかく聖書遍歴といふ楽しみが生れて來たのである。戦争が終つて數年あまり經つた頃だつたと思ふ、偶然に文庫版で約百記と題する本を見つけた。それにはR・A・シュレーダーの端書が四十頁ほどついてゐた。實の所この時にはシュレーダーがどんな人かは全く知らなかつた。始めの方にこの書をメールヘンとして讀むとあつたので興を惹かれた。この人の文章はくり返して讀まないと解しにくい所があり、童話として讀むとは云ふものゝむづかしいものであつた。わからぬ所はわからぬままとしてこの端書は約百記のよき案内になつてくれた。そこでシュレーダーといふ人について知りたく思つて探すと「ドイツ語の名人」といふ本があつた。敗戦後ドイツ語の價值と名譽を再認識するためにルターから現代詩人まで何十人といふ詩人の作品をラジオで朗讀したことがあつて、シュレーダーはその詩人一人一人について短い講演をなした、それを本として出したのがこれである。最後に彼自身のことが出て來るから彼の詩も朗讀されたのであらう。シュレーダーには申譯ない事だが、彼が現代の詩人であることを始めて知つた。彼自身も自分の詩は多くの讀者をもつてゐないと言つてはゐるが。一八七七八年生れで、ホーフマンスタールやボルヒャルトとは生涯の友であつたし、

若い頃は雑誌「インゼル」の同人の一人としてこれを創刊した。多才の人で詩人であると共に建築家として活動し、一九三三年以後は畫筆を揮つたといふことである。

シュレーダーが自分のことを記した中に、四十を過ぎた頃から父祖の宗教に歸つたといふ記事が目についた。ホラチウスやヴィルギリウスをドイツ語に移した作品があつて人からも人文主義者と目されてゐたが、個々の人間の心の中に巢食ふ惡があるにもかかわらず唯一人の神はすべての背後に、すべての上に在してそれぞれのものを父としてその手に抱き給ふといふことを悟り始めたと言ふ。委しく述べてゐないからどういふ動機からであつたかはわからないが、愛の祕密は曰く言ひ難しと彼自らも言ふ。文學と藝術と二つの活動を一身に兼ねて來たシュレーダーは兩者がそれぞれ相離れたものではなく、世界を結び合せる鎖の環をなすものであり、この奉仕の任務を顧みない藝術はその使命を誤り、龍を描いて點睛を逸したのになつて、もし藝術がその任務を知つたならば、最もすぐれた藝術品の上にも次のルカ傳の言葉が記されてあることを藝術は承知してゐると彼の藝術觀を結んでゐる、即ち「なんぢら命ぜられし事をみな行^なしたる時も我儕は無益の僕なすべき事を行^なしたるなりと謂へ。」

まだ敗戦後遠からぬ頃である、「我裸にて母の胎を出たり、又裸にて彼處に歸らん」といふ智慧の言葉はドイツでも日本でも胸にひびく時であつた。ドイツは敗れたがドイツ語は亡びず立直らうとした時でもあつた。ドイツでは敗戦の前にすでに多くのユダヤ人が、一九三〇年代の新しいドイツがもはや祖國ではなくなつたドイツ人がヨブの災難を経験しなければならなかつた。従つてドイツでは約百記は相次いで二重の経験でもあつた。前に述べた藝術觀はこの経験の中から生れ出たものであらうし、そこから約百記を見たことも察せられる。ヨーロッパ傳統の人文主義の知識とキリスト教信仰への復歸とそして詩人の魂を以て記されたこの端書は文庫版につけられた目立ぬものであるけれども、すぐれたものとして讀むことができた。

富み榮えたる人ありて思はざることからその富を失ひ、貧しくなるが、塵の中にあつてやがて神の恵みにより目出度く榮えて結びとなる筋は童話の型である。シュレーダーによつてトルストイの民話イリヤスを指摘されたが、如何にもトルストイらしく、富を失つた老夫婦が貧しいながらも心の平安といふ見えぬ寶を得た話はたしかに約百記の物語と絲を引く。約百記の成立年代や作者について考證も多くなされてゐるやうであるが、恐らくは遊牧民族の口から口へ語り傳へられ、話上手の人は何處にも居るから話も面白くなり、神の言葉として傳へられたものが、それについてしばしば重ねられた論争が加はり、今の形にだん／＼となつて行つたものであらう。童話を聞く者は驚きの心を持つてゐなければならぬ。また驚く心を失はなければ隨所に童話を見つけることができる。聞き手が語り手になり、語り手が聞き手になり、つまりどちらにも驚きの心が動くのである。童話の筋は語り手だけでなく聞き手も知つてゐる。話の中の人物だけが知らないのである。だから話の中には驚きがある。そして聞き手が驚くのも知らないからである。終りはわかつてゐながら話の間は話の中の人物と共に聞き手もそれを知らないからである。人間の運命は一寸先きは闇である、まして不幸がつづけば運命の不可解を嘆くは當然である。神は何處に、その意志は何か、この問がつづく限り約百記は讀まれるであらう。そして讀者はその度毎に嘆き、驚き、最後に安心をとりもどし、いつまでも去りやらぬ餘韻に耳を傾けるであらう。

幸福なヨブが出現する。「その所有物は羊七千、駱駝三千、牛五百耦、牝驢馬五百、僕も夥多しくある」大金持である、その上に息子七人、娘三人の子寶にも恵まれ、まことに地上の暮しは充ち足りてゐる。そしてヨブは正しく、神を畏れ、惡に遠ざかるのであるから全く非の打ちどころもない。そればかりか、その子達は仲よく、宴筵を設けては互に招き合つて安穩太平の日を送つてゐるが、「その宴筵の日はつる毎にヨブ必ず我子らを召びよせて潔む、即ち朝はやく興き彼ら一切の數にしたがひて燔祭を獻ぐ、是はヨブ我子ら罪を犯し心に神を忘れた

らんも知る可らずと謂ひてなり。」即ち富み榮えても常に戰戰兢兢として深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如く神に従順だつたのである。

もとより天上では神これを知り、ヨブのことを我が僕と呼んでゐる。所である日、神の子等きたりてエホバの前にたち、サタンも來りてその中であつたのである。サタンが來たので天上は騒然となつたとは記されてゐない。それはどう云ふ理由か、などといふのは後の世になされることで、話の語り手も聞き手もそのままに取上げ、受入れてゐるのである。物語はそれでよいのである。エホバとサタンの對話もすらくと運ぶ、昨日またかくてありけり、明日もまたかくてありなんの調子で。始めてファウストを讀んだ時、神の面前にメフィストフェレスがこのく／＼と出て來たのを不思議に思つたが、童話の世界では木や石がものを言つてもそのまま通るのであるから、むづかしくさへ言はなければ天上の序曲は讀むほどに興味が深くなる。それはそれとして今エホバはヨブの一切の所有物をサタンの手に任ずことをとりきめる。エホバがヨブを讀めたたへた時、サタンは言ふ、「汝の手を伸て彼の一切の所有物を撃ち給へ、然らば必ず汝の面かほにむかひて汝を詛はん。」ここで言ふ「詛ふ」といふ動詞はヘブライ語では *barech* であつて一般的には *segnen* の意味であるが、反對の意味にも使ふことがあつて、*je-manden absagen* の意味にもなり、別れの挨拶、つまり神の祝福を祈つて訣別することから交りを斷つといふ意味になるとのことである。

前にヨブが燔祭を獻げた時の言葉、

我子ら罪を犯し心に神を忘れたらんも知るべからず

英譯では

It may be that my sons have sinned, and cursed God in their hearts.

ルター譯では

Meine Söhne möchten gesündigt und Gott *abgesagt* haben in ihrem Herzen.

ルーターの譯では

Vielleicht haben meine Söhne gesündigt und Gotte in ihrem Herzen *abgesegnet*.

ブルームの辭書に segnen の項を見るに、ルーターの譯の原文が出ている。

meine söne möchten gesündigt, und gott *gesegnet* haben, in jrem hertzen.

ルーターの例を擧げると

汝の手を伸べて彼の一切の所有物を撃ち給へ、然らば必ず汝の面にむかひて汝を詛はん

put forth thine hand now, and touch all that he hath, and he will *curse* thee to thy face.

recke deine Hand aus und taste an alles, was er hat: was gilt's, er wird dir ins Angesicht *absagen*?

schicke doch deine Hand aus und rühre an alles Seine, ob er nicht in dein Antlitz dir *absegnet*!

recke dein hand aus, und taste an alles was er hat, was gilt's, er wird dich ins angnsicht *segnen*?

これらよりしてみれば日本語では、詛となつてゐる動詞が英譯では curse ルターは segnen と譯したが祝福すると同じ動詞なので後に absagen と改められ、ルーターは segnen と區別して absagen としたことがわか

る。ヘブライ語では同じ動詞を使つて區別が出来たのは興味深い。

神の座で行はれたことはもとより人の身として知るべくもない。ある日突如として不幸が相次いで起つた。「牛耕^{たが}しをり牝驢馬その傍に草食ひをりしに、シバ人襲ひて之を奪ひ、刃をもて少年を打殺せり、我ただ一人のがれて汝に告んとて來れり」と使の者が言ひ終らぬ中にまた一人來て、神の火が天から降つて來て羊や羊飼ひの少年を焚いたと言ふ。それが終らぬ中に三人目の使が來て、カルデヤ人の襲撃で駱駝を奪はれ番人が殺されたと傳へ、その言葉が終らぬ中にまた一人來て、大風が吹いて家がつぶされ、宴を催してゐた子女たちはみんな下敷になつてしまつたと告げる。不幸の報せが四度び息つぐ間もなく重なる話し方は實にうまい。語り上手はいつでもあるが、文字に頼らず、口から口へと傳承が動いてゐた頃には次ぎ／＼に語り傳へる一人一人が話し上手であつたのであらう。家内繁昌、延命息災は一度に失せてしまつた。ヨブは起上り外衣を裂き髪を斬り地に伏して拜し言ふ、「我裸にて母の胎を出たり、又裸にて彼處に歸らん、エホバ與へエホバ取り給ふなり、エホバの御名は讚むべきかな。」語り手はいつの間にか智慧の言葉を知つてこれを物語に加へた。信仰が生きてゐたと見るか、地上にはいくつも不幸があつてその經驗は長い年月の間に積み重なつてゐる。それから來た諦觀の言葉であつたか。恐らく兩者は離せないであらう。

天上ではどうかであるか、昨日の如く今日もまた、昨日と今日との間にどれだけの日が經つてゐたかはわからな
いが、また神の子等きたりてエホバの前に立ち、サタンもその中に入つて來る。對話の始めは前と同じく、それにつづけてエホバは「汝われを勤めて故なきに彼を打惱さしめかしど彼なほ己を完うして自ら堅くす」と言ふ。サタンはそんなら今度は「骨と肉を撃ち給へ、然らば必ず汝の面にむかひて汝を詛はん」とすすめる。そして今度もエホバはサタンの手に任せる。ヨブの信仰と神の信頼は共にその大きさを示す。併し今度の試練は殘酷であ

る。ヨブは「其足の跣より頂まで^{いたたま}に悪しき腫物」を生じ、「土瓦の碎片を取り其をもて身を掻き灰の中に坐」つてゐるよりほかどうすることもできなかつた。後にヨブが友に語つた言葉を借りると「わが肉は蟲と土塊とを衣服となし、我皮は愈^いてまた腐る」有様となつたのである。水腫^{すいしゅ}乾疥^{かんせう} 疥癩^{けいら}癰疽^{おうじゆ} 如是^{にせ}等病^{とうびやう} 以爲^{いみ}衣服^{いふく}にも較べることが出来るであらうか。しかも經典ではこれは經典を誹謗する者の報いと説かれてある。神を誹謗したことのないヨブは身の苦痛と運命の不可解に對する苦惱で言葉も出なかつた。傍に居る妻は見るに見かねて「汝は尙も己を完うして自ら堅くするや神を詛ひて死ぬるに如ず」と言ふ。ヨブの破滅をすすめるひどい言葉に聞こえる。だからここにサタンの誘惑があると解することもできる。傳承時代にはどのやうに聞かれたであらうか。富み榮え、子寶に恵まれた生活から忽ち轉落した上に夫の身體がこんな有様となつては氣も動轉するのは當り前のことで、まして苦しむ夫が一切だんまりでうめくばかりではつひこんな言葉も出て來るかも知れない。ブレークの畫では妻は夫の足元で跪いて顔を手で蔽つて泣きくづれて居る。妻の悲嘆は妻の愛情として描かれてゐる。ブレークの約百記の畫面はどれも夫婦仲よく揃つてゐて、妻の顔は可愛い。最後の結びの場でヨブは再び榮え、また十人の子女に恵まれることになるが、約百記で妻のことが出て來るのはこの言葉が出て來る所だけである。シェーラーは心配して最後に子供がまた出來た時、その子は妻の子だらうか、別な人の子だらうかと言つてゐるが、ブレークの畫では始めと同じ可愛い顔の妻が傍に居て、嘆く姿の時だけは顔をかくしてゐるが、神に感謝の顔を擧げ、サタンが失墜するのを見てはヨブと共に驚きの目をまるくしてゐる。まだ十人も子供を生めさうである。アブラハムの妻サラは「婦人の常の經^ミ已に息」んだあとにイサクを儲けた例しもあつたのだから不思議がるに及ばないであらう。

物語に歸ると、ヨブは妻の言葉を聞くと忽ち口を開いて言ふ、「汝の言ふ所は愚なる婦の言ふ所に似たり、我

ら神より福祉を受くるなれば災禍をも亦受ざるを得んや」と。ここに第二の智慧の言葉が生れた。かくてヨブは試煉に耐えることができた。まつたくその唇をもて罪を犯さなかつたのである。かくて第一の危機、第二の危機を免れた。だが二度あることは三度とやらで、話し上手の逃す所ではない。聞き手はうすうすと豫想しながらやはり話に引き込まれてしまふ。ヨブの災難を聞き、之を弔りかつ慰めようと互に約して來た三人の友が圖らずも第三の危機となつた。そして對話とも獨語ともつかぬ言葉のやりとりが全四十二章の中二十九の章を占める。

富を失ひ惡臭を放つ腫物が全身に出來ては誰も寄りついて來ない。妻だけが側に居る。そこへ友あり遠方より來るのだから嬉しい筈である。友は彼を慰めようとして來たのだから嬉しい友情である。けれども來て目の前に見るヨブの姿は聞いて想像してゐたのとは較べものにならないほどひどかつたので、三人の友は「齊しく聲を揚げて泣き、各おのれの外衣を裂き天に向ひて塵を撒きて己の頭の上にちらし乃ち七日七夜かれと偕に地に坐して、一言も彼に言かくる者なかりき。」先きに妻は慰める言葉なく唯絶望の言葉しか出し得なかつたのであるが、ヨブにはこれを妻の愛と解するだけのゆとりはあり得べくもなかつたから叱りとばして智慧の言葉にすがつて苦痛に耐えたのである。いくら苦しいからとて神を試みることは勿論できない。だが遠くから來た友は何も言はず唯嘆くばかり、しかも七日七夜も黙つて泣かれてはとても耐え切れなかつたであらう。妻の言葉には腹を立ててすまふことができた、夫は妻を叱つて苦難に耐えるとは遊牧の時代とても變らなかつたのかも知れない。今度は違ふ。自分の姿は自分にはわからぬが、こんな具合ではどれだけみじめな姿になりはてたかを餘りにあざやかに見せつけられるに等しかつた。情が仇とはこのことかも知れない。

今はもう黙つて苦痛に耐えることはできなくなつてしまつた。口を開いたヨブは己の日を呪ふよりほかはなかつた。かくまで神を畏れ惡に遠ざかつて來たのにかくばかり災禍が次ぎ／＼に襲つて來なければならぬのは何

故か。それは全くわからない。わかるのは今の苦痛だけ。生れなければよかつたのだ、何と烈しく己が生を呪ふ言葉が口を衝いて出て来たことか。ギリシヤ悲劇にも出て来たし、何回となく繰り返された言葉であるけれども、「我が生れし日亡びうせよ、男子胎にやどれりと申し夜も亦然あれ」で始まる第三章は生の呪詛と苦惱の文學として頂點に立つものと言はれよう。「如何なれば艱難にをる者に光を賜ひ、心苦む者に生命をたまひしや」と怨みも出て来る。「わが歎息はわが食物に代り我呻吟は水の流れそそくに似たり」「我は安然ならず穩ならず安息を得ず惟艱難のみきたる。」聞く者は魂消える思ひにゆさぶれるばかりである。

妻がヨブに向つて神を呪つて死ねと言つたのは、呪ふの原語義は交りを斷つ意味であることはすでに見て来た。信仰を捨てよといふことになる、あんなに盡してゐるのにこんな目に遭ふとは神も佛もあるものかと言ふのであらう。だがヨブは不可解な神の意志を恐れたからこそ愚な婦に似たりと言つて妻を却けた。だから今も神を呪ふことはしない。生れたことを呪ひ、生れ出た身は艱難の中にあつて「死を望むなれどもきたらず、之をもとむるは藏れたる寶を掘るよりも甚だし。」苦痛の呻吟は今呪詛の叫び聲となつて迸り出るが、わが生への呪であつて神への呪ではない。

ヨブの言葉を聞くと三人の友はもう黙つて居れない。テマン人エリバズ、シュヒ人ビルダデ、ナアマ人ゾバル、各々口を開き、ヨブ一々これに答へて大論争となり、それが第四章から第三十一章までつづく。論争といふことになるといつつの間にか始めの思ひとは變つたものになり、當事者たちはそれに氣がつかないことがよくある。ヨブに同情し、ヨブを慰め、生きる力添えをしようとして来た三人の友はいつしかヨブを責めるものとなつてしまふ。災難に遭つてもエホバの御名は讃むべきかなを守ることのできたヨブは己が生を呪ふことから神の公正な審判を請求するに至り、友は神の正義はゆるぎないものとすればかかる結果は罪の報いと考へねばならなくなり、ヨブ

は何と言はれても我が義しさに狂ひはないと主張を譲らず、先きにヨブと妻の間に喰違ひがあつた如く、今もヨブと友との間の喰違ひは大きくなり、對話は獨語の調子となり遂に三人の友は説得できずに黙してしまふのである。

ヨブがこれまで「衆多の人を誨へ諭し」、「手の垂たる者をば強くし」、「膝の弱りたる者を強くし」、「神を畏こみ、道を完うして來たことは友もよく知つてゐる。然るに「今この事汝に臨めば汝悶え、この事なんぢに加はれば汝おぢまどふ」とたしなめて、われら人間は「土の家に住みをりて塵を基として蟬蟪のごとくに亡ぶる者」で「その魂の緒あに絶ざらんや皆悟ることなくして死にうす」ものである。「神は大にして測りがたき事を行ひたまふ、其不思議なる事を爲し給ふこと數しれず……神は傷け又裏み、撃ていため又その手をもて善く醫し給ふ。」だから「もし我ならんには我は必らず神に告求め、我事を神に任せん」と言ふ言葉を聞けば友の情が出てゐることがよくわかる。併し先きに「我ら神より福祉を受くるなれば災禍をも亦受ざるを得んや」と言つたヨブのことであるから、友のこの言葉は百も承知のことである。だから成程と黙ることはできない。「然ば我はわが口を禁めず、我心の痛によりて語ひ、わが神魂の苦しきによりて歎かん。」そして言葉は口をついて出かけたらずまゐることを知らない。苦痛の文學としてすぐれた言葉が淀みなく聞き手の耳にひびいて來る。間に友の言葉が替る替る入つて來るが、それは流れを阻む石が瀧つ瀬を作り、水の勢は更に増して急湍激流をなす趣に似てゐる。友の一人が「神あに審判を曲げ給はんや、全能者あに公義を曲げ給はんや、」だから「汝もし神に求め、全能者に祈り、清くかつ正しうしてあらば必ず今汝を顧み汝の義しき家を榮えしめたまはん」と言つてくれても「我まことに其事の然るを知れり、人いかでか神の前に義しかるべけん。」それはわかつてゐるのであるが、同時にまたわからなくなつて來る。「われ神に申さん、我を罪ありとしたまふ勿れ、何故に我とあらそふかを我に示し

たまへ。」汝は土塊をもてするがごとくに我を作りたまへり、然るに復われを塵に歸さんとしたまふや。」いくら考へてもわからない。「汝は我を乳のごとく斟ぎ、牛酪のごとくに凝しめたまひしに非ずや、汝は皮と肉とを我に着せ骨と筋とをもて我を編み、生命と恩恵とをわれに授け我を眷顧みてわが魂神を守り給へり、然はあれど汝これらの事を御心に藏しおきたまへり。」謎は言葉に出して言ふほどますます深まつて来る。

「汝らが知る所は我もこれを知る、我は汝らに劣らず……汝らは只謊言いつはりばなを造り設くる者、汝らは皆無用の醫師くすしなり」と友に向つて言ふヨブは謎の不可解にます／＼惱むからのことであつただらう。「我は全能者に物言ん我は神と論ぜんことを求む」と言はざるを得なかつたのは今まで知つてゐたつもりつもりの智識がみなくづれ、自らの知を以てしてはもはや立てない所に追ひつめられたからである。だがそのどたん場にあつて、「われ汝にむかひて呼はるに汝答へ給はず、我立ちをるに汝只われをながめ居たまふ」ばかりでは今はとりつく島もない。「わが皮は黒くなりて剝落ち、わが骨は熱によりて焚け、わが琴は哀の音となり、わが笛は哭の聲となれり。」聞き手もヨブと共に涙を流すばかり、琴の音、笛の聲は耳の奥までひびいて来る。

ヨブの長くつづいた詞は終り、三人の友も答える詞なくなつた時、ブジンバラケルの子エリフが怒を發せりと話をつづく。エリフがいつの間に来てゐたのかはここに來るまでわからない。エリフの言葉によればずつと始から居て四人の詞を聞いてゐたやうである。エリフの章は後から挿入されたといふ説も成立つ。傳説は雪達磨みたいに轉がりつつふかれて行くものだから、これもいつの頃からか入りこんで來たものであらう。ヨブと友との對話にしてもさうであらう。エリフが怒つたのは「ヨブ神よりも己を正しとするに困りて」であり、「三人の友答ふるに詞なくして猶ヨブを罪ありとせしによりて」であつた。エリフは年若いので年長者たちが語つてゐる間は遠慮して黙つてゐた。「日を重ねたる者宜しく言を出すべし、年を積みたる者宜しく智慧を教ふべし」と思つた

が、さうではなくて「全能者の氣息いき人に聰明せいめいを與ふ、大なる人すべて智慧あるに非ず、老たる者すべて道理に明白なるに非ず」といふことがわかつたから敢て言ふのである。論語讀みの論語知らずの諺通り人間は年を重ねてもなか／＼賢くなれるものではない。第三十二章から第三十七章までわれわれはエリフの詞を通して神學を聞くのである。エリフは出生の地も示されてゐるから人間であるには違ひないが、最後のエホバ出現の場ではエリフのことは一言も出て來ない。「一箇の使者」とか「千の中の一箇にして中保となり」とかいふ言葉が出て來るが、エリフは或はこの役を與へられた者であらうか。エリフはヨブに向つて「我は潔淨いさぎよくして愆とがなし」とか「我は辜なく惡き事わが身にあらざ」とか「彼われを攻むる罅隙ひまを尋ね、われを己の敵と算へ、わが脚を桎かせに夾はめわが一切の舉動に目を着け給ふ」と神と爭論しようとするが、「まことに神は一度二度と告示したまふなれど人これを曉らざるなり」と言つてここに辯神論を展開する。神は「艱難なやむもの者を艱難によりて救ひ、之が耳を虚遇によりて開き給ふ」のであるから、「收贖あかひの大なるが爲に自ら誤るなかれ。」人間には神の意志はわからない。不可解と見える時にこそその意志の大なるを知るべきである。それを苦しいから叫んで見ても神の意志は知るべくもない。「なんぢの號叫なんぢを艱難の中より出さんや、如何に力を盡すとも所益あらじ。」だからむしろ「なんぢ神の御所爲みわざを讚歎ほめたふことを忘れざれ。」そしてエリフは神の業を讚歎するが、いくら讚へても盡くすことはできない。「全能者はわれら測りきはむることを得ず、彼は能おほいなる者にいまし審判をも公義をも枉たまはざるなり、この故に人々かれを畏る、彼はみづから心に有智かしことする者をかへりみたまはざるなり。」

ここに大風の中よりエホバの聲がとどろき渡る。大喝一聲「無智の言詞をもて道を暗からしむる此者は誰ぞや」ときめつけてから神は創造の一つ一つを述べる。これだけの力ある神と論ぜんとするものこれに答ふべしと詰めよられてヨブは「嗚呼われは賤しき者なり、何となんぢに答へまつらんや……われ已に一度言たり、復いはじ已

に再度^{また}せり重ねて述べじ」と答へるはかはなかつた。エリフの言葉の時には何度も口を開きかけたが、エリフはこれを抑へて語らせなかつた。ヨブとエリフと神は共に實に雄辯である。一言口をついて出ると止る所を知らない。だがここではヨブももう言ふ言葉がなくなつてしまつた。神は更に言葉をつづけて自ら創造の讚歌を語る。所でその言葉の勢が河馬^{かば}や鱷^{わに}といふ奇怪な恐しい動物を作つたことにまで及ぶのは少々脱線氣味であるが、ユーモアもあり、聞くものにとつては話が面白くなつて来る。

ヨブは最後になつて「無知をもて道を蔽ふ者は誰ぞや、斯く我は自ら了解^{きとら}ざる事を言ひ、自ら知らざる測り難き事を述べたり」と自ら心にかしこしとする者であつたことを悟り、「われ汝の事を耳にて聞きふりしが今は目をもて汝を見たてまつる、是をもて我みづから恨み、塵灰の中にて悔ゆ」と始めて悔恨の言葉を洩した。まことに詩篇の中に曰く、「神のもとめ給ふ祭物^{まつもの}はくだけたる靈魂なり、神よなんぢは碎けたる悔いしころを藐^{あは}しめ給ふまじ。」そこで神は三人の友に向つて「汝らが我に關きて言述べたる所はわが僕ヨブの言たることの如く正當からず」と叱りつけ、ヨブを嘉納し、之を中保として三人の友を罰することを止め、——（ここで一寸一言挟むと、神がヨブを我僕と呼んだのは始の天上の場と終の場と二回である。ブーバーの書いたものによると「僕」と呼ぶことは中保へ召命することを意味するのであると。神が三人の友に言つた言葉の中で「わが僕ヨブなんぢらのために祈らん」といふのは祈るの原義 *sich ins Mittel legen* 中保となるを示すとのこと。）ヨブは前に倍する繁榮を恵まれて目出度し目出度して話は終る。子供は前と同じく男子七人、女子三人出來た。語り手はここで女の子にだけは名前を與へてゐる。第一をエミマ、第二をケジア、第三をケレンハップクと名づけ、「全國の中にヨブの女子等ほど美しき婦人は見えざりき」とも附加へてゐる。お伽噺には美しき女子が出て來なくてはならない。所でエミマとは小鳩の意、ケジアは肉桂花、ケレンハップクは紅の小壺といふ意味とのこと、恐らく聞

き手は名を聞いただけで美しい顔立を想像できたかも知れない。

ところで神はヨブの言葉を正しとしなかつたと同じく三人の友の言葉も同様に正しくなかつたと腹を立ててゐる。友の言葉には非の打ちどころはなく優等生の答案みたであるのに及第できなかつた。神の採點の仕方は人間の仕方とは違ふのかも知れぬ。「善人なをもちて往生をとぐ、いはんや惡人をや」は彌陀の誓願不思議といふほかはない。神學の知識だけではまだ信に遠く及ばないことを知らねばならない。「念佛を信ぜん人は、たとひ一代の法を能々學すとも、一文不知の愚どんの身になして、尼入道の無智のともがらに同して、智者のふるまひをせずして、唯一向に念佛すべし」と一枚起請文に仰せあることが思出される。谷崎潤一郎が室町時代の小説「三人法師」を彼の文學の中にとり入れて、その結びの所で三人の法師が發心の動機をまとめると「あながちに惡をも嫌つてはなりません、惡は善の裏なのです、戀をも厭つてはなりません、戀は心の細かいところから起るのです、かの一大事は心の細かい人でなければ思ひ立つことは叶ひませぬ」といふことになると思つてある。心の細かい人にして始めて碎けたる悔いし魂の持主になれるであらう。かくてヨブは心の細かい人であつて發心の體験したのである。この後百四十まで生きたが、年老い日滿ちて死ぬまでどれだけの智慧を積んで行つたかは物語の外である。といふよりも正偏知は神の別名と見るほかはない。

傳説ではファウストは悲惨な最後をとげたが、ゲーテの作品では年老い日漸ちるまでの高齡まで生き永らへた。ファウストの救についてはいろいろと論ぜられてゐる。ファウストの細かい心はどのやうに理解できるのだらうか。それには始めの天上の序曲の光茫がここまで及んでゐるとして、約百記に親しんだ目を天上の序曲に向けて讀み返したい。だからと言つて新しい讀み方ができるわけではないが、これまた親しむ道中と思つてゐる。